



若年認知症について



若年認知症とは

若年認知症とは、65歳未満で発症する認知症を言います。高齢者の認知症と、病理学的に違いがあるわけではないと言われていますが、若年認知症は年齢が若いため、社会的、家庭の問題を多く抱えており、就労の問題など、多くの支援が必要とされています。働き盛りの世代ですから本人だけでなく、家族の生活への影響が大きいにも関わらず、その実態が明らかではありません。

例えば、配偶者が介護する場合には、配偶者自身も仕事が十分できなくなり、身体的にも精神的にも大きな負担を強いられることとなります。また、発症して診断がつくまでにかかる時間は高齢者より長くかかったり、いくつかの医療機関を経てやっと診断されるということもあります。

● 他の疾患と間違われやすい

若いゆえに、認知症の症状が現れていても「うつ病など別の病気だろう」と判断されがちです。少しでも早く専門医で診断を受け、治療を開始することが大切です。

若年認知症の人を支えるために

若年認知症に関する問題は、家庭や社会で中心的な役割を果たしている人という意味で、高齢者の認知症より深刻かもしれません。診断が遅れることにより、治療や支援体制に遅れが出てしまうと、せっかくの「本人に残されている能力」を活かすことができなくなります。本人だけでなく、家族を支えるサポート体制など、医療、福祉、行政、企業、地域が手を携え、さらに充実させていきたいものです。

▼周囲の理解があれば前向きに! (家族の言葉)

夫は若くて身体は元気なものですから、周囲からの理解が得られずつらい思いをしました。周りからはサボっているように見えたようです。病名を伝えてもまだ理解してもらえない時もあります。もっとこの病気を知ってもらい、理解してもらえたなら、今よりもう少し前向きに元気になって暮らせるだろうと思います。



▼病気のことを隠さずお付き合い (家族の言葉)

近所の方が、ウォーキングに誘ってくださったり夏祭りやハイキングに参加させてくださったりしたことで、診断直後に比べると、とても元気を取り戻したと思います。若いからと言って病気のことを隠さずにいられたことで、私たち家族も支えられています。



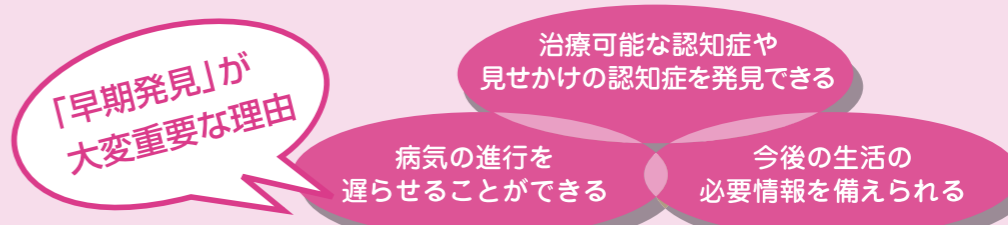
早期発見が大切な理由

高齢者の認知症と同様に、若年認知症も「早期発見」が大変重要です。

第1の理由 は、脳腫瘍や正常圧水頭症、甲状腺機能低下症などの「治療をすれば治る認知症」や、うつ病などの「見せかけの認知症」を発見するきっかけにもなるからです。

第2の理由 は、いち早く治療を開始することによって、病気の進行を遅らせることができるからです。また、就労中であれば、本人の就労期間を延長し、職場内の混乱を最小限に抑えることが可能になるということも言えます。早くに診断をされ、疾患に対する理解に基づいて、職場として可能な支援を行えば、本人にとっても、職場にとっても、負担が軽減されます。

第3の理由 は、心の支えや、今後の生活を考える上で、必要な情報を備えておくことができることです。早期診断によって、本人は自分の病態を理解できる間に自分の病気を知ることができ、場合によっては将来の生活の予定を立てることもできます。本人や家族が、医療機関と早くからつながることにより、じっくりと話し合っ、今後の生活環境を整えていくことができます。



若年認知症の場合、多くの方が現役で仕事や家事をしており、軽い認知機能障害であっても生活に支障が生じますが、認知症とは思わず、何かおかしいと思いながらもがまんしたり、そのままにしたりしてしまいます。本人も家族も悩みながら、原因がわからない状態が続きます。

このように変化があっても認知症と結びつかないため、診断や治療が遅れてしまいがちです。



▼怖がらず、できるだけ早く専門医の診断を受けて! (本人の言葉)

仲よくしていた友人が受診を勧めてくれました。同じことを尋ねる私をみて、今までと違うと感じていたそうです。最初は何て失礼なことを…と腹立たしく感じましたが、そのうち自分でも意識をするようになりました。受診することは怖かったのですが、今は、主治医の先生や家族、友人にも支えられながら気持ちも楽になりつつあります。もしも、同じ立場の方がおられたなら、早く診断を受けてくださいと伝えたいです。動き出したら光が見え始めたのですから。



本人とその家族への支援や理解

受診・診断について

若年認知症の検査と診断を受けるには、専門の医療機関を受診し、診察、検査を受けます。若年認知症と診断された場合、本人に直接伝えられることが多いようです。現時点では、認知症の原因となる病気を治すための治療法はないので、病名を知っても辛いだけなのではないかという意見もありますが、これからの人生を周囲の人たちとの交流に支えられ、“その人らしく”有意義に生活していくことは大切なことです。

このため、若年認知症の治療は「病気の進行を遅らせる」とともに、本人や家族の生活や、これからの人生の支援をしていくためのものと考えたほうがよいでしょう。

病名を伝えることは、本人が希望した場合であっても、大きな不安を抱き、深刻な抑うつ状態になる可能性がありますので、周囲の支援や理解が大きな力となります。



▼うまくいかなかった出来事が病気のせいだとわかり、少し安心！（本人の言葉）

よく忘れます。会社でもうまくいかなくなりました。病院に来るのも恥ずかしいやら、情けないやらでしたが、思い切って受診をしました。どうして自分がこんな病気になってしまったのか、何が悪かったのか考え込んだりもします。でも、今までうまくいかなかった出来事が病気のせいだとわかって少しだけ安心することができました。

早期診断と早期治療の機会を逃がさないために

医療機関にかかったとしても初期の症状の現れ方などにより、専門でない診療科を転々とし、診断が遅れることがあります。誤った診断のまま、認知機能障害が目立つようになって、ようやく若年認知症と診断されたものの、早期治療の機会を逃してしまうこともありますので、まず専門医を受診しましょう。

認知症の人の自動車運転

認知症の人の車の運転は家族にとって大きな不安です。やめさせたいと思っても本人の生活手段や生きがいを奪うことになりはしないかとためらい悩んでしまいます。

鉄道やバスなどの公共交通機関が発達している都市部に比べ、地方には「車がないと生活できない」というところもたくさんあります。今まで車を出かける時の交通手段として使ってきた人に対し、認知症になったからいままぐ運転はやめましょうと言っても、すぐにやめ

られるものではありません。しかし、そのまま放っておけるものでもありません。すぐに結論がでることではありませんが、症状が軽いうちから主治医に相談し、どうするのが一番いいのか、家族全員で考えていきましょう。

「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル（監修：荒井由美子）」（国立長寿医療研究センター長寿政策科学研究部のホームページからダウンロードできます。）には、運転者が認知症になった時の対応が具体的に紹介されていますので参考にしましょう。

「認知症高齢者の自動車運転を考える家族介護者のための支援マニュアル（監修：荒井由美子）」
<http://www.ncgg.go.jp/department/dgp/index-dgp-j.htm>



▼苦労しました。車の運転をやめてもらうこと！（奥さまの言葉）

運転をやめてもらうことについてはとても苦労をしました。何度も主治医と共に説得をして、ようやく夫は受け入れてくれました。車の運転はできなくなりましたが、大好きだった旅行には電車で行こうと計画しています。

子どもへの対応について

若年認知症の方は、子どもと一緒に暮らし子育てをしている年齢で発症され、様々な課題に直面されることも多いことから、子どもへの対応も考えていく必要があります。

● 子どもへの説明

認知症によって親の様子が徐々に変わっていくことに子どもが不安を抱くことが多くあります。子どもの理解力にあわせて親の病気について説明し、子どもが親との時間を悔いなく過ごせるようにすることが重要です。

● 子どもへの支援

若年認知症の方を親に持つ子どもへの支援は、子どもの成長にあわせ精神的、経済的なことも含めて考えていかなければなりません。

例えば、幼い子どもであれば、親代わりとなる大人の存在も必要となります。また、子どもが、受験や進学、就職、結婚、出産、子育てなど人生の大きなライフイベントを迎える時期にある場合もあります。子どもには介護などを理由に人生の選択をあきらめることがないように、同居の家族、親族、地域、学校などが連携しながら、数年先から十数年先を見据えた支援が求められます。



▼病気の説明をみんなで聞いてから、家族で支えることが出来ました！（奥さまの言葉）

先生から夫の病気について説明をもらったのは、もう数年前になります。「お父さんの病気は治らないの？」と泣いていた子どもたちも、今では大学生と高校生になりました。病気の説明を聞いてくれたことで、家族みんなで夫を支えることができ、周囲の皆さんからは子どもたちを支えていただくことができました。